

「やらせと演出の境界線」

制作者の倫理、視聴者の倫理

「制作倫理と公共倫理がつながるために」

作り手の「個」の立ち位置

組織にて「公共」を考える

公共の「プロフェッショナル」

い まやテレビを語るときによく使われる
〈やらせ〉という言葉。

この言葉は一体どこから来たのか。
〈やらせ〉と〈演出〉の境はどこにあるのか。

人々に広がるテレビ不信に、きちんと向き合っていくため
にも、制作者は視聴者の疑問に説明責任を果たしていくこ
とが求められる。

フリーディレクターをしながら、
各地で出前授業やワークショップを展開する
村井明日香氏に聞いた。



村井 明日香 フリーディレクター

プロフィール
1974年生まれ。フリーディレクター。NHK・BS1『経済最前線』、フジ『報道
2001』など報道番組を企画制作。メディア研究にも力を注ぎ、東京大学大学院ではテ
レビを語るときによく使われる〈やらせ〉という言葉がどこからきたのか、答えを見つけ
るべく制作者を訪ね歩く。現在は制作者と視聴者を結ぶワークショップを各地で開催。

人々に広がる不信とテレビ離れ

2009年は放送倫理・番組向上機構（BPO）^{*1}が勧
告や意見を相次いで公表し、存在感を高めた一年でした。
放送局による「やらせ・捏造・虚偽・過熱報道」が発生し
たこともあり、BPOに寄せられた視聴者意見は前年を大
きく上回り、過去最多^{*2}となりました。次々と起こる不祥事、
人々に広がる不信とテレビ離れ。こうした事態に放送局も
真剣に向き合うことが求められます。

フリーディレクターとしてNHK・民放で活躍されてい
る村井さんは、こうしたテレビ不信の背景について、「制作
者が現場のことをあまりにも語ってこなかったために視聴
者と大きな感覚のズレがある」としています。

最近の撮影現場で取材相手に何かをお願いすると、「あー、
やらせ！」と言われることが増えているそうです。例えば、
インタビューでうなずいているシーンを別撮りすることは、
放送局にとっては馴染みのある手法ですが、視聴者には信
じられない光景に映るからです。

これまで制作者と視聴者は〈やらせ〉をめぐる時には
反目しあい、悩ましき問題として向き合ってきました。

・何が〈やらせ〉で、何が〈やらせ〉でないのか。
・〈やらせ〉という言葉は一体どこからきたのか。

制作者と視聴者の距離を縮めるために、こうした視聴者
の素人的な見方や感覚を制作現場はどう受け止めていけば
よいか。〈やらせ〉問題をテーマに、東京大学大学院で研究
をおこなった村井明日香さんに聞きました。

〈やらせ〉誕生の背景とは

——そもそも〈やらせ〉とは何でしょうか。

広辞苑によると、「事前に打ち合わせして自然な振る舞いらしくおこなわせること」と書かれています。しかし、この定義を基にして、〈やらせ〉をやってはいけません、と言ってしまうと制作現場は困ることが多い（笑）。ではどこまでが許容され、どこまでが駄目なのか。常に私はそうした悩みを抱えながら撮影をしてきました。

こうした悩みを抱える制作者は少なくありません。1993年には民放連^{※3}が解決策を見つければ、〈やらせ〉の範囲を整理しましたが、制作現場に普及したとは言いがたいのが現状です。〈事実の再現〉を許容すべきかどうかで意見が分かれたままになっています。

〈事実の再現〉を許容すべきかどうか。これに関する意見の対立が鮮烈にあらわれたのは、1992年に放送されたNHKスペシャル『禁断の王国・ムスタン』^{※4}でした。これは制作者にとつては撮影現場で必ず出くわす問題であり、『あるある大事典Ⅱ』^{※5}のような捏造問題よりもっと身近で落とし穴になりうる問題です。

——〈やらせ〉という言葉は一体どこからきたのですか。

図書館の奥に眠る資料を調べました。その結果、〈やらせ〉の誕生、すなわち〈やらせ〉という言葉によってある制作手法が批判されるようになったのは1966年。放送評論家・志賀信夫さんが一般誌でドキュメンタリーの登場人物に演技をしてもらうことを〈やらせ〉として批判しています。〈やらせ〉という言葉を丁寧に説明していることから、当時の言葉が一般にはまだ広まっていないことが窺えます。

——当時の制作手法はどのようなものだったのですか。

〈事実の再現〉が〈やらせ〉と批判されなかった時代でした。私は当時のドキュメンタリーの代表格といえるNHK『日本の素顔』^{※6}を基に考察してみました。実際に『日本の素顔』を立ち上げた吉田直哉さん^{※7}によれば、撮影はまず、台本に沿って1カットずつ「次は○○を撮らせていただけですか」という演技指導をしながら進めていたとのこと。当時のカメラはフィルム式で1回ゼンマイを巻くと15秒しかもたないもので、普通どおりにしてくださいというわけにはいかなかった（笑）。つまりワンカットを再現するといった劇映画のような手法がドキュメンタリーには採られていました。

今なら〈やらせ〉と批判されると思いますが、当時この手法を批判する人はいなかったと言います。それは単に視聴者がそうした撮影手法を知らなかっただけではありません。その理由は吉田さんの当時の言葉を読み解くとわかります。ドキュメンタリーが映し出すリアリティーについて「現実を素材とするドキュメンタリーフィルムは製品となったときにはもう現実を示しはしません。それが示すのは真実か虚偽だ」と述べています。つまり、ドキュメンタリーが映し出すものは、「現実そのもの」ではなく、「真実（制作者が番組内で作り上げるリアリティー）」だとしていました。

——その後、〈事実の再現〉が〈やらせ〉として批判された背景には何があつたのですか。

1965年当時の代表的なドキュメンタリーだった日本テレビ『ノンフィクション劇場』の『ペトナム海兵大隊戦記』^{※8}を基に考察したところ、ドキュメンタリーのリアリティーの変容があることがわかりました。

※1 「放送倫理・番組向上機構（BPO）」

放送事業の公共性と社会的影響の重大性を踏まえて、正確な放送と放送倫理の高揚に寄与することを目的とした非営利・非政府の団体。言論・表現の自由を確保しつつ、視聴者の基本的な人権を擁護するため、放送への苦情や放送倫理上の問題に対し、独立した第三者の立場から対応している。

※2 「BPOに寄せられる視聴者意見」

2009年度11月末時点で17,386件と、2007年度の過去最多を更新、月平均2000件以上のほる。

※3 「民放連」

日本民間放送連盟の略。ラジオ・テレビジョン放送事業者による放送倫理水準の向上ならびに業界共通問題の処理を目的に設立された団体。会長はテレビ朝日の広瀬道貞氏。

※4 「NHKスペシャル 禁断の王国・ムスタン」

スタッフに高山病の演技をさせたり、人為的に流砂現象を起こすなどしていたことが、翌93年2月に表面化した。NHKは緊急調査の結果、19か所に問題点があつたことを認めた。

※5 「発掘！あるある大事典Ⅱ」

痩せる食材として紹介した納豆に関する解説で、データ改ざん、捏造がされていたことが発覚。放送全体に関して、視聴者からの信頼を大きく揺るがす事件となった。

『ノンフィクション劇場』が映し出すリアリティーについて、日本テレビ報道局社会部の記録では「ベトナムで日常的に起こりつつある出来事を、ありのままの姿で国民の前に提出したものである。問題のシーンにおいては一言のナレーションも加える必要はなかった」と述べています。この番組で映し出されたリアリティーは、制作者が介入しない「ありのまま」事実そのもの」であることを強調しています。

この時代はベトナム戦争をめぐって米国とソ連の壮絶な情報操作合戦がおこなわれており、ドキュメンタリーは「事実そのもの」を伝えるべきだという意識の高まりがありました。先ほど紹介した志賀信夫さんのコメントはこうした時代背景のなかで生まれたものだと思います。

〈やらせ〉問題の解決に向けて

——リアリティーの変容が〈やらせ〉の問題を難しいものとしたのですね。

ドキュメンタリーは「事実そのもの」を伝えるべきだという意識の高まりがあったのに、「事実そのもの」が伝えられないジレンマ、それが批判を生みました。こうした構造が分かる、現在起こっている〈やらせ〉論争が終わりを見せない理由がよくわかります。

改めて、これまでの最大の〈やらせ〉論争、『禁断の王国・ムスタン』について考えてみると、流砂や高山病の「再現」が問題となりました。それについてドキュメンタリーは「真実」を伝えるべきだとした人は、「許せる」とした。「事実」を伝えるべきだとした人は、「許せない」としました。そもそも求めるリアリティーが違ったのです。このときドキュメンタリーにはどんなリアリティーを求めるべきかを議論しなければならなかったはず。それが置き去りになり、

どこまで許せるのかという許容の線引き議論になってしまったことは残念です。

当時のNHK会長の川口幹夫さんは活字メディアの批判に押されるかたちで謝罪しましたが、自信を持ってNHKの文化について語っていけば、ドキュメンタリーとは何かという根本的な議論が活性化できたと思います。

——〈やらせ〉の問題を解決するための一歩として、どのような取り組みが考えられますか。

〈やらせ〉の問題を解決するためにはテレビのリアリティーはどうあるべきかを考える必要があります。それは制作者だけではなく、視聴者と一緒に考えていくべきものだと思います。そこで私は各地でワークショップを展開し、視聴者との意見交換を続けています。

一昨年11月に横浜市の中学校で320人を対象におこなったワークショップ型の授業は地元の新新聞でもとりあげられ、大きな反響をいただきました。

授業ではまず、実際に〈やらせ〉として問題になった事例をもとに、「許せる」「許せない」に分かれて議論をしてみもらいました。双方の意見の相違の根本には、番組に求めるリアリティーが異なることを理解してもらうことを目標にしました。そのうえで、双方の立場の人が納得できる解決策を考えました。解決策として生徒から出てきたのは「再現というスローパーをいれる」「この番組は感動することを目



村井さんの大学院時代の研究企画書

※6 「日本の素顔」
1957年に放送を開始したドキュメンタリー番組。日本が高度成長を遂げていた時期に、一方で様々な社会的歪みを生み出しており、主にこれらの社会的様相を描いた。

※7 「吉田直哉」
東大卒業後、1953年にNHK入局。ドキュメンタリー番組の草分けとされた『日本の素顔』や大河ドラマの演出を手がけた元ディレクター。

※8 「南ベトナム海兵大隊戦記」
アメリカに支援された南ベトナム政府軍の海兵隊の従軍記。放送後、内閣官房長官の橋本登美三郎が日本テレビ社長に抗議し、第二部、第三部の放送が中止に。政府の言い分は残虐な場面があるからというもの。国家による言論介入があった番組として有名。

的にしているという共通の理解をすればいい」などかなり現実的な提案がありました。

こうした実践を積み重ね、提案された視聴者の声を制作現場に還元する方法を考えていくことが大切です。放送局がこうして視聴者の声を聞き、現場の方法にとりいれていくことが、社会的信用を取り戻す一つの方策になると信じています。

フリーの立場から見るNHK

——NHKと民放の現場を経験されて違いを感じますか。

NHKと民放を比べて、メディアに対する意識が根本的に違うと思います。

NHKはジャーナリストティックに人の知らないことを掘り出してくる姿勢がすごい。例えば、企画段階において、他のメディアで放送されたものはまず通らない。もし、どうしても出したいのであれば独自の視点を徹底的に説明しないとダメです。とにかく大変です。

民放はまったく逆です。新しい情報を知らせるより、映像を見て泣いたり怒ったり笑ったりしたいという人間の欲求に応えることを重視しているように思えます。だから、放送する前に他局で放送されたというケースがあれば、「お前の感性は正しかった」と評価されます。民放はテレビが共感のメディアであることを強く意識しているからだと思います。

——今後、NHKにどのようなことを求めますか。

NHKが培ってきたノウハウをぜひ社会に提供してほしいです。とくに評価されているノウハウは「映像で語る」という制作技術です。ナレーションやスーパードットに頼ること

なく、映像だけでディレクターが伝えたいことがきちんと伝わってきます。そして、このノウハウが代々継承される風土や仕組みがきちんとあることはすごいことだと思います。一方で、民放はほとんど外注化されているうちに、プロデューサーが番組制作経験が多いとは限らず、確たるノウハウが継承されにくくなっています。だからこそ、NHKには日本の制作者を育てるといった大きな視点での取り組みを期待しています。

ディレクターやジャーナリストを養成する機関が日本にあまりないというのも課題となっています。メディアが多様化するなかで、誰もが見よう見まねで何とか番組を作っているのが現状です。だから倫理的な違反やほころびも増えています。アメリカではコロンビア大学^{※9}のような教育機関が整備され、テレビ局や新聞社が出資して共通のノウハウを作ろうという動きもあります。そういった意味では、日本ではNHKがノウハウを蓄積する唯一の組織だと思いますので、こういった取り組みを充実させてほしいと願っています。

インタビューを終えて

村井さんはディレクター業務をしながら、メディアに関する出前授業やワークショップ活動に精力を注いでおられます。授業や説明の工夫次第で、たとえ中学生であっても言いつ放しの批判ではなく、制作現場にとって役に立つ意

※9「コロンビア大学」
米国のニューヨーク州にある私立大学。新聞経営者ジョセフ・ピューリッツァーの遺志により1912年にジャーナリスト科大学院が創設。

見も言えるようになるそうです。

私たちも各地で視聴者と対話する「場」が設定されています。その際は番組や受信料制度など視聴者から見やすい部分の意見交換はできませんが、実際の制作手法などを議論するなど、一歩踏み込んだ制作者と視聴者の関係作りをしていくためにも、「場」の工夫をさらにしていかなければならないことを感じました。

報告 中央放送部長 小磯 亮